説教20220626「今こそ、救いの日」エレミヤ31：33-34　二コリ5：16－6：4

「今こそ、救いの日」と言って、私たちは日々を生き、キリストの救いの恵みを隣り人に告げ知らせています。それでは私たちが言っている、この救いとは何でしょうか。それは、例えば、今日来る津波が完璧に予報されて、街の人全員が救われたとか、今日、人生で最愛の人と出会えて、これからの私の人生は救われた、といったような話ではないのです。今言ったようなことは、それはそれで喜ばしいことで、そう言った出来事の一つひとつもキリストからの恵みだと言えるかもしれません。しかし、「今こそ、救いの日」と私たちが言っているのは、キリストの救いによって、私たち人間は、最後の最後まで永遠に救われて、永遠の命に生きるようになるという、格段に喜ばしい出来事なのです。

キリストの救いとは、私たちが自分自身に信頼して生きるのではなく、キリストに信頼して生きるようになることです。パウロというキリストの使徒は、今日の聖書箇所の一つ前の15節で、キリストが死んだのは、私たちが永遠に生きるためであり、「生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです」と明言しています。

キリストを信頼するということは、十字架で死なれたキリストに、十字架まで従って行くということです。そして、十字架の下で我が身を顧みて、「主よ、あなたの裁きを望みます[[1]](#footnote-1)」とキリストに告白して、キリストに我が身を委ねて、我が身が打ち砕かれて、自分の罪も打ち砕かれて、そうして自分に代わって罪を背負って下さったキリストによって罪が赦されて、清い心と体にされて、又、立ち上がらされるということです。キリストは私たちが自分の罪を心から悔い改める時、私たちをキリストと一つのものとして下さって、キリストの憐れみと慈しみの内に入れて下さって、私たちは永遠のキリストの命に生かされるようになります。洗礼を受けて「今こそ、救いの日」と言っている私たちクリスチャンは、今日も又このように、隣り人たちに語って参りたいと願います。

パウロがこの地上を生きた頃、クリスチャンという呼び名は未だ普及しておらず[[2]](#footnote-2)、一般的ではありませんでした。では当時のクリスチャンはお互いをどう呼んでいたのでしょうか。はっきりとは判っていませんが、今日の17節でパウロが言っています、「キリストと結ばれる人」というのがクリスチャンのことを指していると言えるでしょう。日本語で「キリストと結ばれる人」といいますと、いささかまどろっこしいですが、これを英語でいえばin Christと、簡潔に言い表せます。ともかく、パウロ達は、自分たちがクリスチャンであることを認識するために、お互いに「キリストと結ばれる人」と言って、分かり合っていたのでありましょう。さてこの「キリストと結ばれる人」という表現は、とても直接的でわかり易いです。私たちはキリストと結ばれて、キリストのうちに生きるようにされ、又この教会というのはキリストの体であり、私たちはキリストの体の一部分とされているのです。そしてキリストが私たち一人ひとりの内に住んで下さるとも言えます。この様にイエス様は、私たち一人ひとりと一つとなって、共に歩んで下さる、インマヌエルの神様なのです。

クリスチャンと言いますと、例えば日本の中で、あるいはこの街の中で、特有の色合いといいますか意味づけを、良くも悪くも与えられていることでしょう。例えば、クリスチャンは、礼儀正しいが気位が高い、などど隣り人から評せられることもあるかも知れません。ですから私たちクリスチャンは、今一度パウロが言う、「キリストと結ばれる人」という呼び名に立ち返って、キリストのものとなった自分自身を振り返って参りたいと願います。

私たちが、キリストのものとなる、キリストと一つになるというのはどういうことでしょうか。それはこの世界の全てのものがキリストによって一つとされていくということです。そうして、全てのものは新しく創造されたものとなるのです。17節に「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」とありますが、私たちも含めてすべてのものはキリストによってそのように、新しく創造されていくのです。それは、今の世の中で力を振るっている、「同調圧力」などとは、似ても似つかないものです。イエス様が、私たちを一つとされていくその仕方のイメージは、イエス様が「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか」[[3]](#footnote-3)と言われていることからも知られるでしょう。このようにイエス様は私たち一人ひとりを呼び集め、情愛を込めて養い育て、全員を一つのものにされようとしているのです。そしてその新しく創造された世界というのは、聖書の中のイザヤ書 65章 25節で記されているように「狼と小羊は共に草をはみ　獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし　わたしの聖なる山のどこにおいても　害することも滅ぼすこともない」という、将に、人間の思いをはるかに超える主の平和が実現した新しい世界の到来なのです。

さて、私たち一人ひとりも、この主の平和が実現した新しく創造された世界に入る様に、ここに呼び集められています。そして、今日の聖書箇所の主題として語られています「和解させる任務」を私たちは担っているのです。18節に「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する務めをわたしたちにお授けになりました」と記されている通りです。ただ、この「和解」という日本語を、俗世間でいういわゆる仲直りというような意味合いで捉えますと少々誤解を招くことになりかねません。

では、ここでいう和解がどういう意味かといいますと、イエス様は、私たち人間全員を「めん鳥が雛を羽の下に集めるように」身元に集めて、私たちを一つにされようとしています。ですから、私たちもキリストのために奉仕して、この一つとされるための役を担いなさいということなのです。ですからたとえ私たち自身に仲直りをする力やチャンスがなかったとしても、私たちは、キリストの使者として、この務めを担って行っていく時、かえって、キリストによって和解させられ仲直りさせられるということもあるのです。

このコリントの信徒への手紙二の中には、パウロが、かつて滞在したコリント教会の信徒達と和解するために心を尽くし力を尽くした姿が描かれています。それは言い換えれば、信者同士でもキリストにあって一つになっていない、和解していないということですが、どうしてそうなってしまうんでしょうか。その理由の一つとして、私たちには人それぞれの個性や体験が主なる神から与えられているからでしょう。例えば、パウロという人の性格は、16節に端的に表れています。「それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません」とパウロは言っています。パウロはこの様に、罪に傾きがちな肉を離れ、肉ではない霊、つまり聖霊によって満たされて、地上生涯を歩んだ人でした。クリスチャンなら誰しも、聖霊に満たされて、日々生かされるものではありますが、パウロの場合は、この地上で聖霊に満たされ聖霊の賜物を受け渡す歩みを、誰よりも熱心に行ったのでした。一方で、パウロの様ではない使徒がいたことも聖書には記されています。１２使徒たちが聖書には出て来ますが、彼らは、この地上でイエス様と「いつも一緒にいた者」[[4]](#footnote-4)たちでありイエス様と生活を共にしたのでした。つまり１２使徒たちは生身のイエス様を知っていたのです。イエス様と共に旅をし、食事をし、寝床を共にしたのです。ですからそんな彼らとイエス様との出会い方は自ずとパウロとは異なり、イエス様が天に昇られた後の、イエス様との在り方も、又パウロとは違うところがあったのでした。彼らは、この地上でイエス様と生活を共にしたいわば生き証人ですから、そのイエス様との実体験を重んじて、イエス様があの時こうされたとか、あの時こう言われたなどといった、直接的な見聞を重んじて、そのことを語り伝える使者とされていたのでした。この様に使徒と言ってもその経験や性格は人それぞれで、キリストから与えられる役割は人それぞれなのです。

さて、振り返って今の私たちはどうでしょうか。私たちもパウロと同じく、生身のイエス様と行動を共にしたことは在りませんが、１２使徒たちからの語り伝えによって、キリストを信じ、キリストと一つとされているのではないでしょうか。又、生身のイエス様は知らないけれども、聖餐や、キリストのお祈りの内に頂く食事の場に招かれることで、隣り人を通してイエス様に触れるといったことがないでしょうか。

この様に私たち人間は人それぞれ違っていますから、そんな私たちがキリストと一つとされ、和解されていく仕方は、時に応じて人に応じて、それぞれであります。そしてそんな一人ひとり違った個人の集まりである教会の中にあっても対立や摩擦が起こることがあります。聖霊に満たされたパウロは、教会のなかで大胆にキリストの和解の務めを果たしました。彼は「キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい」と語ります。それでも彼がそのように自分の仕方で熱く語れば語るほど、彼が受けた苦難、欠乏、行き詰りは深刻になっていったようです。

ではなぜ「今や、恵みの時、今こそ救いの日」とキリストとの和解を説く務めが、こんな辛い状況をもたらすのでしょうか。それはこの和解の恵みが、人からの恵みではなく、将に主なる神イエス・キリストからの恵みであることに関わっているでしょう。冒頭に申し上げましたように、私たち人間が受けようとしている救いとは、この地上で命が長らえるとか幸せな日々を送れるとかいったことをはるかに超える、キリストから受ける永遠の喜びであり、慈しみ、憐みであります。私たちは新しく創造され、その主の平和が完成した新しい世界と一つとされるのですが、それは人と人とが仲直りしたというレベルをはるかに超える、キリストから与えられる恵みによって実現する世界全体の平和であります。そしてその主の平和が実現するまでには、個人としての私たちは、苦難、欠乏、行き詰りの場所に立たされることがあります。しかしキリストに信頼し、最後の十字架の時にまで、キリストに従順につき従って行く者には、復活の命が与えらます。そして全ての機会を無駄にされないキリストの恵みが私たちにますます与えられ、その苦難を通して、私たちの和解の務めは遂行されていくことでしょう。なぜならその苦難の中でこそ、キリストの救いは実現されていくからです。私たちは今日も、「今や、恵みの時、今こそ救いの日」と隣り人に語りながら、いついかなる時にも、キリストから恵みの上に更に恵みを受けて[[5]](#footnote-5)、全世界が新しく創造されるその時を目指して、共に歩んで参りましょう。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（4,516字）

1. 詩編26：1 [↑](#footnote-ref-1)
2. 使徒言行録11：26　田川建三『新約聖書　訳と註　第一巻』（作品社、2008）pp.107 [↑](#footnote-ref-2)
3. ルカによる福音書13：34 [↑](#footnote-ref-3)
4. 使徒言行録1：21-22 [↑](#footnote-ref-4)
5. ヨハネによる福音書1：16 [↑](#footnote-ref-5)